

アメリカで歌った啄木の歌



宮地 智子

(詩人)

娘を持つ母親なら恐らく誰しも担うであろう孫の世話というものは嬉しくもありまた、大そう骨の折れる仕事でもある。

御多分に洩れず私にもそんな役割がめぐって来て、娘一家の住むアメリカに行くことが多くなった。三度目の今年は五月末から七月初めまでの長きに渡った。二歳半と一歳二か月になる孫娘は両親ともに日本人ではあるが二つの国籍の持ち主である。上の子は英語と日本語を同時に覚え始めていて、家では日本語、保育園では英語という風に上手に使い分けている。さて、彼らが住んでいるニューヨークの冬は厳し

く、子供たちはもっぱら家の中で遊ぶしかないの、春になると親はできる限り子供を外で遊ばせたがる。ところがどうしたことか、二歳半になるわが孫娘は外に出るのを嫌がり始めたのである。「スクウォーラル ウィル バイト ミー」(りすが囁みつくから)と彼女は言う。そんな経験はないのにである。ふわふわの尻尾をちょこんと立てて軽やかに走り回りますの姿は何とも愛らしいものではあるが、毎日のように公園に出没する彼らは人の目を盗んで食べ物をつつたりするので一たびそんな目に遭えば大人だつたりすを憎らしく思うようになるらしい。そういえ

ば鳩でも雀でも、アメリカでは日本に居るものと比べると動きが敏捷で癡猛な感じがする。生存競争が厳しいのだろうか。それはともかく、わが孫娘はせっかくの晴れた日にも頑として外には出たがらず、ガラスの窓越しに外を眺める毎日である。飛ぶ鳥の影がさつとよぎるのでさえええ恐がり、細目にしか開けていない窓さえ閉めてほしいと訴える。そんなある日、いつものように窓際に立って「モーン」と言っているのが私の耳に聞こえた。それが何を意味するのか思案するうち、ふと窓に寄って外を見上げると、昼の月が高い空に懸かっているではないか。「ああ、ムー

ンね。」と聞き返す私に、彼女は「ムーン。」と発音し直し、それ以来私の日本語訛りにつき合ってくれている。

さて、娘一家はニューヨークでの生活に別れを告げ、ボストンに移り住むことになっていった。けれどその前に一週間ほど娘が仕事で家を留守にするため、留守番という大役を仰せつかっていた。さまざまな心配ごとがこの一家にのしかかっていたのではあるが、案ずるより産むが易し。二重唱で大泣きに泣いて泣き疲れて寝た夜もあったし、絵本を読み聴かせているうちにいつの間にか眠ってしまう夜もあった。一週間後、母と子は喜びの再会を果たし、一方、母親不在の間に父と子の絆も強まったようであった。しかし孫娘の外出嫌いは改まることなく、大人たちの心配は募るばかりであった。母親が仕事に出ていることで淋しい思いをさせ、そのために子供が心の病いにかかったのではないかという自責の念にかられる娘の心情も推し量られて、私にとっても辛いことであった。とはいえ、保

育園のお別れ会では、悲しんだのは専ら先生方や親の方で、孫娘達は甘いカッターケーキを食べて大いにはしゃぎ回ったらしい。

ニューヨークからボストンまでの汽車の旅では、海にヨットが浮かぶ景色も見え隠れして楽しかった。さて、新しい生活は六月というのに寒く雨催いの日から始まった。アパートの窓からの景観は緑ひとつ見当たらないビルばかり。娘の夫は仕事の都合で一か月遅れて来ることになっている。日本からやって来た若いベビシッターさんは体調を崩して寝込んでしまった。娘は研修医としての仕事も始まり当直の日もある。扱い馴れない二人乗りのベビーカーに二人の孫を乗せ、ビニールカバーを被せ、私は頭から雨合羽を被って保育園まで送り迎えをする雨の日が続いた。スーパーマーケットで食料品を買い込むことは心弾むことではあったが、どこか緊張感がつきまとうのであった。蒸し暑さがなく空気が冷たいのはむしろ救われる思いであったものの、私は

何かしら心に渴きを覚えていたらしい。ある日窓からしとしと降る雨を眺めながら石川啄木の歌を口ずさんでみた。「馬鈴薯のうす紫の花に降る雨を思へり都の雨に」。するとどうだろう。二歳半の孫娘がこの歌をたどるように口を開くではないか。そしてその子を膝に抱いていた私の娘もまた、ぼつと顔に明かりが灯ったように柔らかな表情になつて聞き耳を立てているではないか。

幸福なひとときであった。私はその時、この歌を口伝てで教えてくれた学生時代の友人を思い出していった。それからまた、いつかノートに書き写したところのある佐藤春夫の「さにづらふわが恋びとのまろき頬にあかねさすごとく春は来にけり」という歌も心に浮かんだのであった。

それから良いことがあった。晴れた日、あれ程外に出たがらなかつた孫娘が、私と手をつないで公園まで歩いたのである。地面にしゃがんで小石を拾い集めるのに夢中になったりして遊ぶようになったのである。

線虫に学ぶアンチエイジング 食事制限と長寿(寿命延長)遺伝子



杉本 忠夫

(虎の門病院 内分泌代謝科
非常勤嘱託医)

約八十年前に、アメリカのマッケイらの研究グループはラットを使ってある研究を行いました。その研究はラットに食事制限を行った場合、ラットの寿命がどのように変化するのか実験しました。

自由に餌を食べたラットの平均寿命は約六〇〇日でしたが、食事制限したラットのはとんどが六〇〇日以上に寿命が延長しました。食事制限したラットの寿命が延びたことは、予想もでき

ない驚くべき結果でした。

ところで、アンチエイジング(歳をとつても健康に過ごす)学と呼ばれる長寿医学の研究が、この二十年間進んできております。このアンチエイジング学では、長寿(寿命延長)遺伝子に研究の的が絞られてきています。

その中でも線虫を用いた寿命延長の研究がアンチエイジング学の基礎になっています。多くの線虫は土中の大腸菌など主に細菌を食べて暮らしておりま

す。

ところで、線虫と人間との関わりは、団塊世代以前の方には昔の記憶にあると思われませんが、カイチュウ(回虫)とかギョウチュウ(蛭虫)など消化管の寄生虫などです。

植物ではマツクイムシなどがよく知られております。

この線虫類は一億種類以上も地球上には棲息するといわれ、その勢力は地球上の生き物の十五%以上を占めているのではないかと推測されております。

そこで、今回はアンチエイジング学、長寿遺伝子と線虫との関わりを酒林の酒肴にしてみたいと思います。

この線虫を使った細胞死(アポトーシス)プログラムされた細胞死)についての研究で二〇〇二年にノーベル生理学・医学賞がイギリスのシドニー・ブレナーとジョン・サルストン、アメリカのロバート・ホロビッツの三人の研究者に授与されました。

この線虫を使った優れた研究により多くのことがわかってきました。たと

えば、餌を控えめにする、ラットと同様に線虫も長生きすることがあきらかにされました。どのような作用機序が大変興味のあるところです。そこで、いかにして長生きするのか遺伝子面での研究が行われました。

一九八八年、線虫の“age-1”とよばれる遺伝子が寿命を延長することに関与していることが初めてあきらかにされました。

では、食事制限した線虫がなぜ長生きするのでしょうか。研究が進みこのage-1遺伝子が変わる(変異すること)によって寿命が延長することがあきらかにされました。

話題の豚インフルエンザもインフルエンザウイルスの遺伝子が突然変異し、人に猛威を奮う新型インフルエンザになったことはよくマスコミで報道されておりあります。

この長寿遺伝子は、糖尿病の治療に使われているインスリンの働きを弱めることがわかってきました。

ついで、“daf-2”とよばれる遺

伝子の変異も、線虫の寿命を延長することがわかりました。これらの二個の遺伝子の変異の研究によれば、いずれの遺伝子もインスリンの作用を弱めて寿命を延長しているようです。同様な研究が線虫やハエの遺伝子でも行われ、続々と長寿遺伝子が発見されてきました。

霊長類を含む哺乳動物においても、寿命を延長する長寿遺伝子が発見され、現在では二十個以上が明らかになっておりあります。

これらの遺伝子は、インスリンの作用と関連する長寿遺伝子です。その他、細胞内のミトコンドリアに関連する長寿遺伝子も見つけられてきております。

長寿遺伝子をもった線虫にカロリ制限を行うと、寿命がさらに延びることもあきらかにされ、線虫では食事療法が寿命の延長につながるようです。

これを人に当てはめてみますと昔からの言い伝え“働かざるもの食うべからず”に何か通ずるところがあるような気がします。

つまり“身体を動かして働かないと、摂食した食事が消化しないので寿命が延びませんよ”のようにも読みとれます。

最近の糖尿病学の研究も、今まで関心が薄かった長寿遺伝子とインスリン作用と関係の究明に向かってきております。

人の場合は、線虫のように生活サイクルが単純ではなく食事内容、運動、仕事など日常生活が多岐にわたっているため、まだ研究が序にわたっています。実験を培養細胞レベルや霊長類などで行われており、その成果が期待されておりあります。研究が進展し、適切な食事制限による長寿遺伝子の発現機序を明らかにし、健康な長寿を満喫できるもの間近かと考えております。

現段階では、人間は適切なカロリ(エネルギー)摂取により、糖尿病、動脈硬化の予防が大切です。

古くから言い伝えどおり“働かざるもの(余分に)食うべからず”です。

洋酒山ごぼう

中西美子



覚えていられるでしょうか、子供のころ、指先どころかつめの中まで真っ赤に染めて、遊んだことを。実を絞った鮮やかな、色水に真っ白なハンカチをいれて、ピンク色に染めたことを。断片的ではありますが、白いハンカチを母にねだって、母が、「またなお…」と言いながらたんのすの方から少し背伸びして、出してくれたのを覚えています。秋の公園は、赤紫に熟した実でいっぱい、わたしは、白いブラウスを気にしながら袖口を赤く染めて夢中で遊びました。あれは、洋酒山ごぼうと言ったくましい雑草でした。あの頃は、鮮烈な色彩ばかりに眼がいついて、かわいい花が咲くことも、実の落ちた後のがくまで、これほど可愛いとは、気がつかないでいました。小学生の頃を思い出しながら懐かしい気持ちで写生してみました。

「無法松の一生」と岩下俊作



志し村むら有くに弘ひろ

（文芸評論家・
相模女子大学名誉教授）

岩下俊作は「無法松の一生」の作者として知られている。他に「文覚」・「辰次と由松」「聖・もうれん」などの作品もあり、決して「無法松の一生」だけではないのだが、この作品が映画や舞台との関連もあつてか、岩下といえば「無法松の一生」となってしまう。今となつては昔のことであるが、私は岩下と小倉の紫川近くを歩きながら、

「無法松のような作品はもう書かないのですか」
と、無礼極まりない質問をしてしまった。ところが、岩下は表情も変えずに、「あんな作品がポロポロ書けたら大変だ」
と応えてきた。私は無礼な質問を恥じると共に、岩下が「無法松の一生」に大変な自信と誇りを抱いていることを認識した。

岩下俊作（本名、八田秀吉）は、明治三十九年（一九〇六）十一月十六日、福岡県企救郡足立村（現、北九州市小倉北区）に、八田初次郎・コウの二男として生まれた。父は人力車の立て場を行っていた。

「無法松の一生」は、初め「富島松五郎傳」という題であったが、映画化されたときに「無法松の一生」と題され、それが有名になったため、火野葦平などの勧めもあり、「無法松の一生」と改題した。

作品は、小倉を舞台に、貧しい傭引き富島松五郎の吉岡未亡人への秘めた思いとその子敏雄に対する至純な愛情を描いている。松五郎の純粋な性格は、彼が素朴であるだけに、ひとときわ美しい光彩を放つ。かつては賭博現行犯で小倉を追放されたり、若松警察の撃剣の師範と喧嘩をしたりしたこともあった。そうした暴れ者の松五郎が吉岡夫人親子との交流を通して次第に柔和な人物となつてゆく。だが、敏雄が成長し、松五郎は孤独な日々を送るように

なり、最後は、五月の晴れた朝、小学校の運動場の梧桐の下で生徒が歌う唱歌に和しながら息を引き取る。

映画などでご存じのことと思うが、松五郎が敏雄とその先生の前で太鼓を打つ場面は、作品中のクライマックスである。もともと「流れ打ち」「勇み駒」「暴れ打ち」という太鼓の打法は、岩下が作り出した虚構である。虚構といえば、岩下は小倉の古老から「これは無法松さんから貰った煙管でね」と煙管を見せられたことがあったという。架空の人物でも、時にはいつの間にか実在の人物と同じように一人歩きするものらしい。

「富岡松五郎傳」は、昭和十四年四月、「改造」の懸賞小説に応募して選外佳作となり、同年十月、同作品を推敲して「九州文学」に発表すると、第十回直木賞候補となった。さらに、翌十五年六月、改作「富島松五郎傳」が「オール讀物」に発表され、再び第十一回直木賞候補となる。だが、結局、受賞することはなかった。

古老の煙管譚の「一人歩き」とは違うが、「富島松五郎傳」は、演劇や映画の世界でも一人歩きを始めた。昭和十七年五月、森本薫脚色の「富島松五郎傳」が文学座で初演され、翌十八年には、稲垣浩演出／伊丹万作脚本・阪東妻三郎・園井恵子主演で大映から映画化された。東京大学の学生であった松岡欣平がこの映画を入賞前見て、「きけわだつみのこえ」（東大協同組合出版部、一九四九年）の中で「俺は太鼓を打つてみたい。俺は提灯行列をやつてみたい」と記していた。松岡は昭和二十年五月、ビルマで戦死した。二十二歳の生涯であった。入隊前、故国でこの映画を観たことに、ごくわずかだが救いを感じるような気がする。

ところで、稲垣浩は昭和十八年時の映画で、松五郎の吉岡夫人に対するひたむきな情熱の美しさを描こうとした。しかし、軍当局から許可されず、当時としてはぎりぎりの線で妥協して作つたものであった。軍人の未亡人への恋などとんでもないというわけである。

稲垣はその無念の思いを抱き続け、長い歳月が流れたのち、昭和三十三年、三船敏郎主演で再製作し、第十九回ベニス国際映画祭でグランプリを受賞することになる。

「無法松の一生」は、歌謡曲の世界でも「小倉生れで玄海育ち」で始まる「無法松の一生」（吉野大二郎作詞・古賀政男作曲・村田英雄唄）、「どうせ死ぬとさや裸じゃないか」で始まる「あばれ太鼓」（たかたかし作詞・猪俣公章作曲・京・建輔編曲・坂本冬美唄）の「あばれ太鼓」がある。村田の唄う「無法松の一生」には「秘める面影誰が知る」「愚痴や未練は玄界灘に／捨てて太鼓の乱れ打ち」とあり、坂本の唄う「あばれ太鼓」には「愚痴はいうまい玄海育ち」「小倉名代は無法松」という一節がある。共に原作をよく把握して作詞されている。岩下俊作が他界したのは、昭和五十五年一月三十日。

「無法松の一生」は国民文学の一つとして、これからも多くの読者に支持されてゆくことであろう。

日本語吹替

佐川毅彦

弟からDVDプレイヤーをもらったのだがリモコンがなかった。早送り。巻きもどしなどすべて手でせねばならん。

借りてきた洋画を見る時は日本語吹替ができず。字幕で見る事になる。最近視力がおとろえて、字幕が読みにくく、映画の内容が理解できない



時画面をもどして読みなおしている。しようがないので新しくリモコンを買ってきた。

それでなんとかプレイヤーを操作できるのだが、いくらやっても肝心の日本語に吹替ができない。夏の暑い中、帽子もかぶらずリモコンを返品して、別のリモコンをもって帰る。説明書をよく読んで、やってみたが、今度は画面すらでてこん。

まるつきり役に立たん。先のように千円も高く三千円もしたというのに腹の立つ。

たたきこわしてやりたいが汗ダラダラになりながら返しにゆく。

また帽子をかぶり忘れた。

結局、新しいDVDプレイヤーを買って帰った。

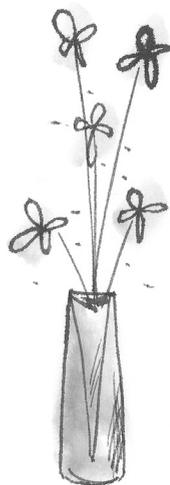
さっそく日本語吹替にして映画を見る。

しばらくすると私は字幕を熱心に読んでいる事に気づく。

読む必要はなかったんだ。馬鹿な事をと画面に集中する。

それから数分して……いかん、また字幕を読んでいる。

「思ハズシテ得ル」



志^し村^{むら}栄^{よし}守^{もり}

(評論家)

一時はどうなることかと思われた新型インフルエンザだが、幸いにして国内では重篤者も出なかったようだ。

実はあの騒動に掻き消されてほとんど話題にならなかったが、看過できない数字があった。昨年、自死者がなんと三万二千人超という、科学的文化が支配的な今日の世相が隠れ持つ暗部を鋭く示すデータのことだ。

確かに利便性は今や、社会に溢れ返っている。当然、情報においてもその通りと思われるふしがある。しかし、この数字を前にしても、はたしてそう言えるだろうか。

自死を決断、決行に至るまでには、この人生にどれほど解答を迫ったことだろう……と想像させていただく、

人生の本当の難問と真摯に向き合っている人への情報(解答)は、耳を傾けるべきものがまことに乏しいのではないか、この疑念が頭をもたげるのだ。そんなこの時代に、小林秀雄の存在は、話題のレアメタルをはるかに超えた趣きがある。

その『志賀直哉』には、志賀『暗夜行路』に触れてこうある。

「それはひと口で言へば深い意味での幸福の探求である。(中略)幸福は、各自が自力で生活の上を探り、知り、創り出すより他はない。」

ところが今、世の中全体が「幸福」を外部に求める思想に傾斜して、「生活の上に」という面にあまりに無関心過ぎないか。つまり権利の主張という外

側へのエネルギーばかりがやけに目立つ時代とは言えないか。

ところで、小林が私達と同様の苦悩を知らなかった人のような誤解を避ける意味で、自著(『Xへの手紙』)でこう書くところを引く。

「言ふまでもなく俺は自殺のまはりを行うついでゐた。(中略)俺は今までに自殺をはかった経験が二度ある。一度は退屈の為に、一度は女の為に。」

もちろん真偽のほどは分からない。ただ文脈からして危険な状況を彷徨していたことは確かと思われる。問題はその同じ人は後に、社会に一つの揺るぎない地位を確立した、この事実だ。その間の乖離たるや相当なものがあるとは、誰の目を以てしても明白だから。

当然、その驚異的飛躍の陰には、内面に覚醒したその畏るべき思想が大きく関与しているはずだ。私達はこれの前にして拱手傍観する手はないのだ。その同じ『Xへの手紙』には、こんな特異な文言が躍ることは引いたことがある。

「言ひ代えれば社会に負けなければならぬ。社会は常に個人に勝つ」。

「社会」という言葉が誤解を招き易いと思われるが、小林がこの当時、自らを救い上げることに躍起になっていたと仮定してみると、謎は解ける気がする。

つまり、文章創作という驚異的な創造性を秘める行為に、自らの将来を賭している！としてみると、言葉が矯激に走ったとしても、そこはそれで仕方ないことか、と。

且つ、目を凝らす人にはこんな風に見えて来ないか。この異様な外見の意味とは、小林が「幸福」を「自力で創り出す」その意欲の苛烈さなのであり、『暗夜行路』に見たそれを自らが決行している姿なのだ、と。

ところでこの時代、社会のあらゆる

面で競争原理が幅を効かせている。社会の活性化に果すその役割りは大きい反面、人間個々の幸福に係わる思想をすこぶる矮小化して、片隅へと追いやっているとは言えないか。

というわけで、こよなく勝つことを好み、讚美して止まない現代人の多くが、首をかしげるであろうところを小林「断想」から引く。

「さういふ性の悪い楽道家等の為に、一粒の麦もし地に落ちて死なずば唯一にてあらん。もし死なば多くの実を結ぶべし」の『カラマアゾフ』の扉の言葉は、書かれたのだ。(中略)ドストエフスキイは矛盾を解決しようと工夫したのではない。解決を工夫するくらいなら、矛盾に殺された方がましだと思つたのだ」。

ともかく「社会に負ける」では少しまずいと小林自身も思つたかどうか!? このようにも書いてくれた。おかげで私達は、有史以来の超絶パラドックスの前で、人間智というものの底知れぬ深さと不思議に思いを馳せる。

これはもちろん、小林の畢生の信念であつたことは晩年の『考へるヒント』

でもわかる。

「(荻生徂徠は)物が我れに來り至るのであり、その間(力ヲ容ヲ容レザルナリ)と解した。我と物との直接交渉が、知を致す基本的な道だ、と解した」。(ルビは原文どおり)。

「社会に負ける」とした「社会」がここでは「物」に変じている。ところがここには、さらにそれ以上のことが書かれている。ひと口に「負ける」とは言うが、具体的には?という問の答、それが引用部分だ。つまり「負ける」とはこういう姿をとる、即ち時間とのつき合いに習熟し我が物とすることだ

と。
また、小林は同著の『歴史』で「太初に言葉あり」を三度。繰り返すが、これを念頭に勘案すると「力ヲ」「容レザル」の意味が判然としては来ないか。するとこうなる。

「思ハズシテ得ル、勉メズシテ中ル」といふ事になる。これを疑ふな、と説くのだ」。

正真正銘の感性とは、こういうものか。

〈美しい牧場〉のこと



桐原良光

(文芸ジャーナリスト)

中国新疆ウイグル自治区の区都・烏魯木齊（ウルムチ）の「ウルムチ」とは、〈美しい牧場〉の意味だ。本当にゆるやかな空気が流れる美しい街だった。

一九九一年の夏、ウルムチを訪ねる機会があった。敦煌からウルムチまで西へ飛んだ国内線のプロペラ機の窓から見える光景は忘れられない。どこまで行っても荒涼たる山また山の連なりであった。山には幾筋もの川の跡が続

いていて、時に見える少しなだらかな丘のようなどころには扇状地のように細かい川の跡があったが、水は全く見えなかった。一年に何日か雨が降ると、あの川の水が流ることがあるのだろうか。山は緑と思うのが日本人の常識だと思うが、山も平地もどこまで行っても乾いた茶褐色の岩山と土の丘の連なりであった。中国の水問題の深刻さが分かったように思えたものだった。

その荒涼たる岩山の連なりが切れると、突然、近代的なビルが整然と並ぶ大都会が眼下に開けた。そこがウルムチだった。ここだけは市の南に位置する天山山脈の雪解け水で潤っているのだ。北京から直線距離で二千五百キロと聞いた。世界地図を広げれば、インドとバングラデシユの国境あたりと経度が一緒。中国は実に広いと思つた。しかしウルムチに降り立って、ここはウイグル族の街だということもすぐに分かつた。漢族とは全く異なる顔立ちと目の色、民族衣装、のどかな雰囲気……。もう十八年も前のことだったから、漢族の数も今よりはまだ少なかつたのかもしれないが、当時から市の主要なポストは漢族が占めていると聞いた。時間は北京時間に統一されていた。時間は十時を過ぎてまだまだ明るかつた。普通に考えれば、時差が二時間はあるという程度差だった。広い。広すぎる。この〈国〉をまとめるには、やはり社会主義しかないのかな、と考えていた。

国際大バザールの店々にはウイグル族の店も漢族の店も混在していた。外国人観光客も多い賑やかで楽しいバザールだった。街のメインストリートはウイグル族の男に追われた羊の群れが行き来するのに何度も出会った。なにしろ〈美しい牧場〉だ。バザールに出品するには、こうして群れで連れてくるのが一番便利だったのであろう。

夕方からは裏通りに〈焼鳥屋〉が出て、呼び込みの声が盛んに飛び交っていた。もちろん羊の肉を串焼きにしているのだから〈焼鳥屋〉のわけはないのだが、日本から来たぼくたちにとっては、屋台の店で炭火焼きにする煙と臭い、そして裸電球の下でのその賑わいは〈焼鳥屋〉そのもので親しみが持てた。安くて旨かった。店をやっていたのはウイグル族の男たちであった。当時から、漢族は「ウイグル族の男たちは努力しない、働かない」と漏らしていた。遊牧民族の末裔たちは、「努力しなくなつて大地が羊を育んでくれるのに、漢族は何をアクセク働き続け

るのか」という思いを抱いていたのかもしれない。こうしたウイグル族の考え方が、ぼくたちのような観光客にもうつつて、のびやかな、ゆるやかな空気の流れるウルムチに人気があったのだらう。ウルムチ一番の観光スポットといわれた紅山に登つて街を見下ろしていると、ここからもメインストリートをゆつくりと斜めに横切つて行く羊たちの群れが見えた。ここだけは違う時間が流れていると思つた。〈西域〉という言葉は、いつでも日本人の心を揺さぶる。日本人の観光客とこの山で出会つて、よくぞお互いここまでという思いで笑顔を交わし、記念撮影のシャッターを押しした。日本人にとつて人気度の高い観光地だったのに……。

二〇〇九年七月五日に起こつた「ウイグル暴動」は、公式発表で死者は百九十七人だが、亡命ウイグル人組織「世界ウイグル会議」によれば千人とも三千人とも言われている。発端は、六月下旬に広東省韶関で発生したウイグル族と漢族の乱闘でウイグル族二人が殺

された事件の映像がインターネットで流れて、ウイグル族の不満が一気に高まつたとも伝えられているが、真相は分からない。暴動に参加した容疑者ウイグル族の男たちが次々と連行されていくという報道もあった。中国にとつては〇八年三月のチベット暴動に続く大規模な民族闘争だ。ウイグル暴動が起こると、イタリヤのサミットに出掛けている胡錦濤主席が急遽帰国した。中国における民族問題がいかに大きな問題であるのかを物語っているのだらう。

ぼくたちがのんびりと歩き回っていた当時から、もしかしたら民族間の諍いはあつたのかもしれない。ぼくたちは、上つ面の〈美しい牧場〉だけを見て、喜んでいたのかもしれない。しかし今もウルムチの主要産業が観光であることは間違いない。〈美しい牧場〉が過去のものとなつてしまつたのは確かなことのようにだ。〈美しい牧場〉に武装警官群と装甲車輛の車列はいかにも似合わない。

『スキヤキ』の次は『スシ』だった



片岡義男

(作家)

一九六一年の日本で『上を向いて歩こう』という歌がヒットした。日本人全員と言うほどに多くの人たちから、強い共感を集め広く支持された。この歌が題名だけ『スキヤキ』と変えられてアメリカで発売され、日本人の歌手による日本語の歌として初めて、アメリカで百万枚を売り上げたヒット・ソングとなった。この『スキヤキ』に続く二匹目のドジョウは、当時もそしておそらくいまも、スシあるいはテンブ

ラしかない。スシのほうが言いやすいからというだけの理由で、そのスシとなるべく選ばれたのは、『鈴懸の径』という歌だった。

『鈴懸の径』は昭和十七年に灰田有紀彦が作曲し、のちに佐伯孝夫が詞をつけ、灰田勝彦が歌ってヒットした。歌われたものとしてのオリジナルの位置にあるのは、灰田勝彦が残した録音だろう。四行詩がひとつだけ、と言っている短い歌詞を、レコードのなかで彼

は二度繰り返し歌っている。

歌詞のなかにある「学舎」とは学校のことだろう。そして「友」とは、そこで学ぶ学友たちだ。友との語らいや通いなれた学舎の町などをめぐって、深い憂いの縁に立ってその底を見ているような、影をたたえて沈んだ曲調とイメージに終始している。作詩作曲されたのが昭和十七年だったことを思えば、この憂いや沈んだ影などは、たやすく説明することが出来る。鈴懸の径がある学舎や、そこでもに学ぶ友人たちなどすべてが、遠からず失われてしまい確実な予感を、この歌は象徴していたはずだ。

昭和十八年の初めから太平洋戦争での日本軍は、敗色を深めていくというの展開となった。学生が学業を中止して軍需生産に従事する勤労動員命令を、日本政府は作った。戦争の末期から敗戦までの期間、これによって三百万人もの学生が動員された。兵役の年齢は四十五歳まで延長され、徴兵適齢は一年下げて十九歳となった。

「撃ちてし止まむ」のポスター五万枚を陸軍省が国内に配付したのが、昭和十八年だ。そしてこの年、徴兵猶予を停止された七万にもおよぶ学生たちが、戦場へと出陣するための壮行会として、雨の神宮外苑競技場を行進した。行進しようとしまいと、学生たちの全員が、それぞれに異なるさまざまな時と場所、万感の思いを込めて、『鈴懸の径』を歌ったのではなかったか。

戦後の日本では一九五八年に、『鈴懸の径』はヒット・パレードに登場した。前年の一九五七年にベニー・グッドマン楽団が日本で公演をおこない、クラリネット奏者のピーナツ・ハッコと、日本のクラリネット奏者の鈴木章治がともに演奏した『鈴懸の径』はたいへんな評判となり、スタジオで録音されなおしてレコードになり、発売された。それが一九五八年のヒット・パレードに登場した。

ピーナツ・ハッコが日本から帰ってすぐに録音した『スイングを少々』というLPのなかに、『鈴懸の径』が収録

されている。『スシ』となるまだ数年は前のことから、『鈴懸の径』という題名はそのまろーマ字書きされ、『プラタナス・ロード』という英訳が添えてある。日本でこの曲を好きになったハッコは、機会があればぜひ録音したいと思いい、メロディを書きとめておいたという。

『鈴懸の径』が『スシ』という題名で、アメリカで単独にレコードになったのかどうか、さらには英語の歌詞をつけられて誰かアメリカの歌手が歌ったのかどうかなど、僕はなにひとつ知らないが、『鈴懸の径』が『スシ』としてアメリカで多少は流通したことは確かなようだ。レックス・コナという人が率いたザ・マンダリンズというグループの、キャピトルから発売されたLP『野性の蘭』を手に入れたら、収録曲のなかに『スシ』があった。

『野性の蘭』はエキゾチック・サウンドの作品集だ。エキゾチック・サウンドのLPには不思議な選曲のものが多く、レックス・コナのこのLPもその

一例だ。『ヴァーモントの月影』『ペグ・オ・マイ・ハート』『パトリシア』『ギンザ・ガール』『ワインよりも甘いキンス』などがならぶなかに『スシ』があり、『プシ・プシ』というタイトルのものともに『炭坑節』まである。

エキゾチック・サウンドとは、編曲の妙というものの、ひとつのありかただ。そのような音楽を作り出す力の基礎は、豊富なジャズの力量の内部に存分に吸収されている、ラテン・アメリカ音楽の素養だろう。『ヴァーモントの月影』は広東州の月影と言っている。どの変貌をとげている。『ペグ・オ・マイ・ハート』や『スシ』の出来ばえは素晴らしい。僕がもともと気に入ったのは『炭坑節』だ。戦後の日本で盆踊りが大流行した時期があった。その盆踊りのテーマ・ソングとも言える『炭坑節』を、子供の僕は夏になるたびに何度となく受けとめたが、あの歌がこうなるとは。これからの僕にとつての主題曲にしたいほどだ。

「十年日記」を書き始める



新田啓造

(ジャーナリスト)

嫁いだ娘たちから昨年末、ちょっと

部厚い日記帳が届いた。一ページに十年間の日記が書き込まれるようになっていたので、書き込んでいくうちに昨年は何をしていたか、その前の年は何をしていたか、ページをくぐらず一目で分かるようになっていた。

日記というものは若い頃、一、二年にわたって書いたことはあったが、その後すっかりごぶさた状態。メモ帳にスケジュールを書き込む程度だった。

日記帳は、年頭所感なる項目から始

まった。

この日記帳は娘二人(既婚)からプレゼントされたものです。十年間、書き続けることができるかどうかという前に、十年先まで生き続けることができるかどうか。ま、深く考えず、気軽にスタートしようと思つてます。今年には古希を迎える年。思えば、長く生きたいものであります。なんとも情けない年頭所感でした。続いて十年日記の使用例が紹介されました。

※毎日の出来事を思いつくままに書いていくだけで、十年間分の自分史が出来あがります。ベッドのそばにおき就寝前の日課にはいかがでしょう。

※従来的一年一冊の日記は書き終わるとしまいこんで、そのまま過去を読みかえす機会も少ないようです。でも、この十年日記なら十年間のことが一冊でわかります。

その他、欄外に家族や親しい人の誕生日を五日前くらいに明記しておくこと、ブレゼントやメッセージが忘れることなく間に合います、と親切。とにかくスタートすることにした。

一月二日 孫二人をつれて、あずの公園まで入間川に沿って歩く。二、三km歩く。帰りは仁君(10kg)抱いてきたので疲れた。TVでは正月番組ばかりでつまらない。孫と一緒にディスプレイの「一〇一匹ワンちゃん」を観る。日本の美術(江戸)百選アンコール放送は面白かった。

一月五日 温暖な正月が続いている。十二月二十六日からずっと晴れの日が続いている。久しぶりに近くのスーパー

に出かける。株は二ヶ月ぶりに九千円台に戻る。ここに来て樂觀的な経済見通しをする専門家が増えてきた。はたして。

一月十日 天気は回復したが寒い一日だった。こたつに入つて外を見る。冬ざれの野を歩く電車軋みおり山脈に亀裂が走る寒の入り屋根の霜朝日に映えて静まれり

ヘタな句を三句ばかりつくる。毎日家に閉じこもっているとボケるか。明日はどこかへ出かけよう。

一月十四日 午前中、デイラーに車検のため車を出す。午後一時半より、飯能自動車学校で高齢者講習を受ける。実地を含める時間みっちり。適性のほうは平均よりもちよつと上か。いずれにしろ安全運転することが何より大切。雨の日や夜は運転しないようにしようと思う。

一月二十一日 オバマ大統領の就任式を観る。二〇〇万人がワシントンに集まった。アメリカはどこへ行くのか期待が深まる。しかし、現実には厳しい。

株価は下がり世界不況が底がわからなのままに広がっている。アメリカがよくなるなければ、どうにもならない。オバマに期待するしかないだろう。

一月だけでもこんな調子だ。この日記帳、一日に書くスペースが少ないのがいい。日によつて書きたいことがいっぱいある日もあるが、特別、書くことがない日もある。

日記といえは、古くは「土佐日記」「蜻蛉日記」「紫式部日記」「十六夜日記」などが上げられるが、いずれも日記文学で個人の日記とは異なる。

永井荷風の日記「断腸亭日乗」にしても、多くの人に読まれることを意識していないとは思えない。小林一茶の「みとり日記」「七番日記」にしても同じ。ふりかえつて自分の日記をみると、本心を書いているかといえは、やはりそうではない。どこかで他人に読まれることを意識しているような気がする。

ま、そんなことはさておき、いつ何をしたかが分かるだけでもいいか、と

いうことで振り返ってみよう。

六月十五日 いよいよ明日、内視鏡の検査を受けることとなった。昼から病院からの指定食が始まる。昼はまず、サケガユと肉ジャガ。夜は鳥肉のポタージュとビスケット。味はともかく量が少ないのが辛い。初めて座薬を入れる。うまく入っていなかったのか、一向に反応なし。下剤効果が出ない。

六月十六日 十一時から下剤水を十分ごとに二〇〇ccずつ飲まされる。六、七杯目でようやく便意を催す。ホツとする。腸がきれいになったところで内視鏡の挿入。モニターにはつきりと映っている。大きなポリープがみつかり、すぐに切除。八千円に近い手術代だった。一割負担（七十歳以上）でこれだからそれなりの手術だったのだろう。

こんなことを振り返ることができるのも日記の効用と思えば、この十年日記、すてたものでもない。二年、三年と経つごとに楽しみも増えてくるかもしれない。楽しみなことである。